切（きり）　越（こし）

1　集落の歴史

(1)　地名の由来

文禄年間ごろ（1592～96）に作成した越後国郡絵図には「桐越村」と、記載されている。

地名は元来言葉が先で、のちに漢字を当てるのが順序であるので「きりこし」、次に「桐越」「切越」と変化していったものと推察される。さて、桐越の「桐」は中国原産で、人間が利用するために我が国へ持ち込んだ植物であるから、集落ができたとき「目立つ桐の木があった山を越す所」とは考えにくい。とすると、絵図の桐は当て字であったと考えるのが妥当であろう。「切越」となると、牧村方面から見れば、「経塚峰の峠を切り開いて越した所」となる。また、越を山の「腰」の意味に取れば、山の腰を切り開いて開墾した所ともなる。

一方、霧ヶ岳のように、気象現象を地名とするのもよくあることで、霧越と意味を取れば、「霧の峠を越す」となる。事実、この経塚峰は朴ノ木川と高谷川の分水嶺で、霧のか

写真３－104　「慶長２年越後国郡絵図」「桐越村　家三軒九人」と読める
（米沢市　上杉博物館蔵）

かることがよくある。かつて、経塚峰には峠の茶屋があったくらい交通頻繁な場所だったので、霧の峠越えをする旅人が「霧越」と呼び、のちに「霧」が「切」の漢字に変わったとも想像できる。

⑵ 切越縄文遺跡

小字丸山、通称経塚峰に切越縄文遺跡がある。昭和43（1968）年、小黒中学校３年生の社会科学習中に「そんな土器、家にもある」との発言が縄文遺跡発見の発端となった。この中学生は遺跡発掘に参加し、生きた社会科学習をすると同時に遺跡調査にも貢献した。

ここは近くに清水が湧き、高谷川、朴ノ木川の両流域を一望のもとに見渡せる場所で、縄文人の生活条件に合っていたのであろう。４㎞くらい離れた牧村の今清水（いましみず）遺跡は、縄文初期～中期と、当遺跡よりも少し古いが、この住人との交流はあったのであろう。また長野県和田峠産と推定される黒曜石（こくようせき）の鏃（やじり）（矢の根石）と、黒曜石のかけらが出土しているので、ここで加工していたことがわかる。今から3000～4000年も前の切越縄文人は、遠くから黒曜石の原石を手に入れていたことになる（詳細については、資料編及び通史編原始・古代を参照）。

⑶ 地理的環境と交通

切越集落の標高は180～260mで、朴ノ木川の深く、しかも狭い谷の東向き斜面と対岸の西向き斜面にある。集落の南からダムにかけては、砂岩質の凝灰岩（ぎょうかいがん）の厚い層があり良質の湧水が出ている。しかし、集落のある周辺は、横井戸や縦井戸を掘っても地質は泥岩層で、飲料水には恵まれない（凝灰岩、泥岩（でいがん）等の地質は民俗・自然編「自然編」（以下自然編）を参照）。

小黒集落からの古道は、朴ノ木川が深い谷になっているため川沿いにはなく、東向き斜面を切越集落に入り山の中腹を通って菅沼、朴ノ木へと向かってのびていた。牧村方面への道は集落中央部からまっすぐ経塚峰へ登り尾根を越して、高谷や高尾へと続いていた。

かつて経塚峰には、江戸時代末期から昭和の初期にかけては４戸の集落があり、徒歩で尾根を越す人々に峠の茶屋として親しまれたという。平素は農業のかたわらの茶屋であったが、毎年７月中旬、小黒専敬寺の報恩講に合わせて開かれた小黒市には、大勢の人出があり、一杯飲んだ勢いでの帰りに峠の茶屋にたどり着き、再び気炎を上げてにぎやかだったという。牧方面への現在の道路は国道405号となり、上越市へと続いている。一方、沼木方面へは経塚峰から古い上江用水沿いに町道が新設され、菅沼へとのびている。

⑷ 集落の形成

地理的環境の項で切越集落は、「飲料水に恵まれていない」と、述べたが、例外として朴ノ木川の西側、集落の中心部にある池田満雄家（屋号親家）には良質の飲料水がある。この辺りが、切越に初めて住民が住みついた場所ではないかと思われる。

戦国時代末期、今から約四百余年前の越後国郡絵図には、桐越村家３軒、９人と記録されている。当時の３軒が、どの家であるかを特定することは不可能である。その後、幾多の変遷があったであろうが、最初の居住地から上手、下手、川べりへと住居が広がり、さらに川の対岸へと居住区域が拡大していったと想像される。

屋号から見ると、したで、下の上、下の下、

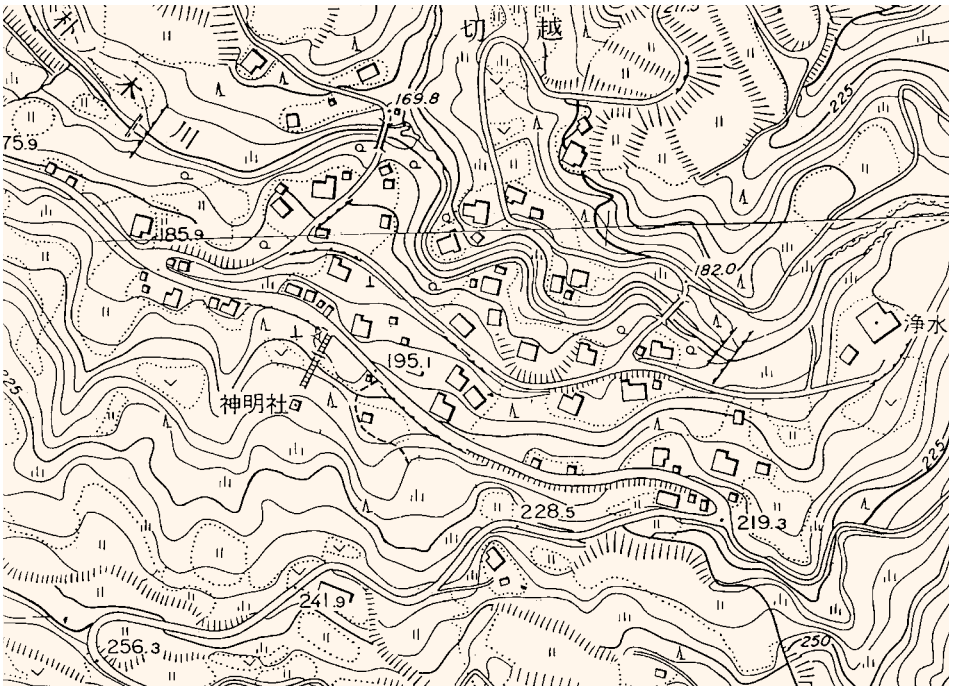

図３－19　大字切越集落図

上の上（かみね）、向かい、などがそのいきさつを物語っているように思える。

(5)　戸数、人口と耕地の変遷

切越村の戸数、人口、耕地が記録されている最も古い文書は慶長２（1597）年の越後国郡絵図である。それには、「直嶺分、桐越村、下、本納６石６斗、縄ノ高12石６斗６升４合、家３軒９人」とある。桐越村は、直峰城主直接の領地で、田の評価は下田、納める年貢は６石６斗、取高は12石６斗６升４合分の面積があるという意味である。

戸数と人口は田畑・屋敷を持ち、経営が安定した農家の数で、実数はもう少し多かっただろうといわれている。天和３(1683)年の検地では、高48石４斗余、家14軒となっている。

江戸時代末期の切越村の古文書は未発見であるから、戸数と人数は不明である。他の村の資料等から推察すると、幕末近くの天保のころには明治初年あたりに近い約45戸、300人くらいの数字になっていたと思われる。しかし、昭和年代の末期から平成年代に入り、過疎化が進んだ。

表３－22　戸数と人口等の推移

年号	西暦	戸数(戸)	人口(人)	縄　高
慶長２	1597	3	9	12石９斗６升４合
天和３	1683	14		36石余
安永９	1780			新田19石９斗余増加
明治５	1872	45		
明治22	1889	46	281	
昭和12	1937	44	357	
昭和30	1955	43	270	
平成12	2000	26	72	
平成15	2003	25	69	

(6)　用水と新田の開発

切越地内には東山用水、上江用水、下江用水の３つの灌漑用水がある。

東山用水は長倉山の山麓の鉱泉が出るので

通称「湯の谷」に築堤された水面約３反歩の池から、集落の東側山腹を引水し、末端は集落の近くまでのびていた。途中の小さな尾根を越す所と、地すべりを回避するための部分はトンネルにする工夫と努力を重ね、切越集落管理用水として維持されてきた。

上江用水（切越では西山用水）は、弘化２（1845）年に菅沼村、切越村、小黒村の３カ村で「取り替せ申す規定證文之事」と約束している古文書が残っている。江代米、水冥加米とも、米３石を納める約束であった。菅沼からの用水路は経塚峰まで来ると、尾根の分水嶺の高さになり水田を潤した。古文書の文面には「御田地養育用水の儀」と水の重要な事を表現している（小黒区有文書）。

下江用水の歴史は古く正徳３（1713）年に小黒村と切越村が、取水場所の替え地についての「替地證文」を交わしている。下江用水は切越集落の下から取水しているので、当集落では用水の恩恵に預かる水田は少なかったと思われる（松苗吉俊家文書）。

以上３つの用水の歴史を振り返ると、新田開発や米の増収のために努力する先人の姿が見えてくる。

用水についての詳細は資料編、通史編ともに近世第５章第３節を参照されたい。

⑺ 朴ノ木川の恵み

長倉山の北西斜面を流域とする朴ノ木川は、真夏の渇水期にも水を恵んでくれる豊かな川である。長倉山から切越ダムにかけて多量に存在する凝灰岩といわれる砂岩は、水を多く含み、後でゆっくりとしみ出す。この恵みの水を江戸時代から灌漑用水の水源として活用してきた(凝灰岩は自然編参照のこと)。

戦後、ビニール、ポリエチレン等の水道管が安価に供給されるようになった。そこで良質の飲料水に恵まれない切越集落の家は集落上手の凝灰岩層からの湧水を共同で引水した。

一方、町内には飲料水不足の地帯があり、特に大字安塚は水質も悪く、町営水道の完備が要望されていた。そこで、昭和37年、町では切越、及び朴ノ木の湧水の水利権委譲を受け、小黒、和田、安塚等の集落に配水しつつ、末端は松崎まで延々と引水した。しかし、その水道水も渇水期になると不足をきたし不評であった。その対策として、昭和52年に完成した切越ダムの水を浄化し水道水とする計画が立案されたが、下流の農業用水の水利権が主張され、その調整は難航した。

⑻ ダムの完成と滝の倉の景観

朴ノ木川は切越ダムの下流約200mの間は、両岸とも凝灰岩の絶壁で、川底の岩を噛んで激流が流れる渓谷になっている。

切越ダムが完成する以前、ダムの本堤からこの岩場までの峡谷は「滝の倉」と呼ばれ、景勝の地であった。春は新緑と三つ葉つつじの紫が渓流に映え、夏は急流が岩にぶつかって飛び散る水しぶきが涼味を感じさせ、秋には紅葉が両岸を飾った。今は、かつての景観を愛でることができず残念である。だが、今でも渓谷の名残を感じることが可能である。

写真３－105　ダム完成以前の滝の倉渓谷
水の侵食によりできた溝を激しく流れる朴ノ木川

(9)　災　　害

長い歴史の間には、飢饉、火災、豪雪、水害、地すべり等の大災害に幾度か襲われたと思われる。しかし、切越には、それを伝える古文書は残っていない。

当町内の地すべりは、粘土質の斜面が水分を含んで滑りやすくなり、じわりじわりと滑る、いわば慢性的なものが大部分である。そのような地すべりの爪痕が切越集落にも見られる。また、地すべりの被害を避けながら、地盤のしっかりした尾根筋へ民家が移動した様子がうかがえる。

伝承として残る地すべりで、その爪痕が現在も確認できる断層が切越集落にある。それは、昭和20年３月20日未明、大音響とともに崩落した地すべりで、従来のゆっくりとした慢性的なものとは異質のものであった。

この地すべりは、断層面の下、約１町歩の水田を含む一帯が陥没するがごとく落下したもので、水田の被害はあったが、幸いにも民家の被害はなく、朴ノ木川がせき止められることもなく終わった。

昭和19年暮れから20年３月は大豪雪の年で、春の融雪水が地盤にしみ込んで軟弱化し発生した地すべりであると想像される（自然編第１章、通史編近現代第７章参照）。

写真３－106　崩落的地すべりでできた断層面

2　切越石と石造物

切越ダム周辺から長倉山にかけての一帯には、凝灰岩といわれる砂岩の層がある。凝灰岩は火山灰と土、砂等が水中で堆積してできたものである（自然編第１章第２節参照）。この石材は石としては軟らかくて加工しやすく、火に強い特性がある。「切越石」と呼ばれるこの石材を加工したものを、現在でも町内で見ることができる。

主な加工製品としては、敷石、石段、かまど、囲炉裏の縁、墓石、井戸側、柱の駒石等、様々であった。池田三（屋号、かつぼ沢）家では代々石材加工を家業とし、かつては職人を雇うほど忙しかったという。しかし、輸送手段、機械加工の発達とともに需要は減り、大正年代で終わりを告げた。

写真３－107　先祖自作の「お守り石仏」ダム下の石材採掘現場対岸の高い場所に安置されていた

3　神　　社

集落の神社は神明社で、祭神は天照皇大神と倭姫神で、明治40年代に菱神社を合祀し、石の祠は現在の境内に移転、安置してある。